「立てられた人たちⅢ」

エペソ人への手紙４：１１

February.11.2024

エペソ人への手紙４：１１（パワポ）

Preface

キリストのからだなる教会を建て上げるために立てられた使徒、預言者という人たちが、どういう役割を担い、どのような職分だったのかを２回に渡って見て参りました。

特に先週は、「預言者」という職分について考えましたが、預言者は使徒と同じように、神からの啓示である新約聖書の言葉が完成するまでの、一過性の臨時的職分であるということを確認致しました。

神さまは、使徒や預言者たちという存在と、彼らが語り記した言葉をもって、新約聖書というキリストの奥義が籠められた聖典を定めて下さいました。

歴史上、ある意味類のない尊い役割を担う恵みに与った方たちが、使徒であり、預言者たちでした。

そして今日は、「伝道者」と「牧師また教師」について考えていきたいと思っております。

Part One

まず、「伝道者」からです。

使徒パウロの言う、また新約聖書の意味する「伝道者」という人たちもまた、使徒や預言者たちと同じように、２０００年前のひと時を生きた一過性の限りある職分でした。

パウロや新約聖書内で使われている「伝道者」という言葉は、現代において使われる「伝道者」という言葉とは、その意味合いが違うように思われます。

現代においては、牧師も、伝道師も、宣教師も、広い意味で皆、伝道者と称されるかもしれません。

例えば、一世を風靡したビリー・グラハム牧師は、世界的な大衆伝道者として知られているように思います。

クリスチャンがまだ少数派であるこの日本でも、１９５６年、６７年、８０年、９４年と４回に渡ってビリー・グラハム国際大会が開催され、沢山の方々がその大会を通して主イエス様を信じ、神の御元に帰るという信仰体験を致しました。

もしかしたら、皆さんの中にも、ビリー・グラハム国際大会に出席された方がおられるかもしれません。

近年ですと、オーストラリア人のニック・ブイチチという生まれながら手足が欠如している四肢欠損症のクリスチャンが、世界を股に掛けたキリストを証しする伝道者としての働きが良く知られているかもしれません。
何冊かニック・ブイチチさんの本が日本語になって出版されていますし、またニックさんの映像や写真はスマホで検索すればすぐに出てきますので、興味のある方はご覧になってみて下さい。
（今じゃなくて、礼拝が終わってからですよ）

このように「伝道者」という言葉は今でも用いられていますので、パウロの言う「伝道者」という職分が、２０００年前当時の一過性の臨時的職分であったということに少しピンと来ないかもしれません。
むしろ、現代において伝道者と言われる方々は、パウロや新約聖書の言う「伝道者」ではなく、広い意味で、「人々の前で公にキリストを証しする人」、または、「伝道者」の次の職分として出てきます「牧師また教師」に類する人たちであると言えると思います。

では、パウロの言う「伝道者」とは、どういう人たちのことを言うのか？
パウロの言う伝道者とは、使徒パウロを含めた使徒たちと密接な関係を持ち、彼ら使徒たちと共に、直接一緒に福音宣教の働きをした者たちでありました。

使徒たちのように、復活されたイエス様に、物理的に五感を伴って出会った人たちではありませんでしたが、使徒パウロや使徒ペテロといった使徒たちが語ったキリストの福音を聞き、クリスチャンとなった人たちでした。
そしてクリスチャンとなっただけでなく、自分たちに福音を語ってくれた使徒たちとともに福音宣教の働きをし教会を立て上げるために、使徒たちから直接「伝道者」としての任命を受けた者たちでした。
つまり、パウロの言う「伝道者」とは、２０００年前の新約聖書がまだ無い時代に、使徒たちと共に福音宣教にその生涯を献げた人たちのことです。
使徒たちとともに、または、使徒たちが及ばない地域に行ってキリストの福音を語ったり、さらには、使徒たちが開拓した教会に残って仕えたり、開拓する前準備のために先に派遣されて行くこともありました。

例えば、使徒の働き６章や８章に登場してきますピリポは、使徒たちから任命された教会の奉仕に仕える執事役員の役割を担っていきましたが、それだけではなく、エチオピアの高官にイザヤ書５３章の説き明かしを通して、イエス・キリストを宣べ伝える「伝道者」としての働きもしました。
ピリポと同じ時同じ場所で、使徒たちから執事として任命されたステパノも、「伝道者」として旧約聖書からイエス・キリストを大衆に堂々と語ったことゆえに、人々から石を投げつけられ殺されていきました。
また、パウロのお弟子さんのような存在でもあり、結婚をせず子供のいなかったパウロに「真のわが子」と称されたテモテやテトスも、パウロの言う「伝道者」

でありました。

彼ら「伝道者」に共通していることは、復活した主イエス様に物理的に出会ってはいないものの、聖霊によって主イエスを信じ、聖霊によって使徒たちを通して「伝道者」として選ばれ、使徒たちと共に福音宣教に従事した者たちであったということです。
そして、御霊と御言葉と神の下さる知恵に満ちた、新約聖書がまだ無かった激動の時代をキリストの福音を宣べ伝える者として、宣べ伝え抜く上からの力と権威に与る者たちでありました。

だからと言って、自らのことを誇るような高慢な者ではなく、むしろ遜り、福音のために労苦を重ねながらも、聖霊によって使徒から任せられた任を諦めることなく、正に命を懸けてその生涯を、２０００年前の主イエス様が復活し天に上げられた直後の疾風怒濤の時を全うした人たちが、使徒パウロの言う「伝道者」でした。
彼らは、使徒たちの働きを補い、その働きの領域を広げ、イエス・キリストの福音が宣べ伝えられ教会が建て上げられたところに、その教会が定着出来るよう身を投じて貢献をした人たちでした。
そして、使徒や預言者たちと同じように、教会の定着や自立と共に過ぎ去った一時代を生きた臨時的職分が、彼ら「伝道者」でした。

Part Two

聖書箇所を見てみたいと思います。
先ず、伝道者ピリポとステパノが、使徒たちによって任命された箇所です。

使徒の働き６：２－７（パワポ）

聖霊の導きに従って使徒たちが、御霊と知恵と信仰に満ちたピリポやステパノを含めた７人の者たちを教会の執事役員として選び、立てました。
すると、彼らを立てたことによって、神の言葉がますます広がっていき、主イエスの弟子が増えていきました。
８節以降は、執事ステパノの伝道者としての壮大な旧約聖書講解説教とその殉教の姿が記録されていますので、家に帰りましたら、ぜひ一度読んでみて下さい。

次は、ピリポの伝道者としての働きの箇所ですね。

使徒の働き８：２６－４０（パワポ）

２０００年のキリスト教会史上初めて、イザヤ５３章からイエス・キリストについて公に説教をした人物は、たぶんピリポだと思います。

なので今でも、この伝道者ピリポに倣ってでしょうか、受難週の時には、イザヤ５３章からキリストの受難について大いに語られております。

もう一箇所、伝道者テモテについての聖書箇所を見てみたいと思います。

テモテへの手紙第二４：１－５（パワポ）

第二テモテは、使徒パウロの生前、最後の手紙、遺言のような手紙です。
その遺言のような手紙を書き送った相手が、「真のわが子」と呼ぶ伝道者テモテでした。
そしてそのテモテは、パウロからの手紙を受け取った当時、使徒パウロが開拓したエペソ教会の牧師として仕えていました。

２０歳前後に使徒パウロと出会い、パウロの宣教旅行に同伴しながら、福音の働き手となっていきました。
そんなテモテがパウロに命じられてエペソ教会の牧師として仕え、パウロの殻の手紙を受け取った時は、たぶん３０代後半から４０代前半ぐらいだったと思われます。
エペソ教会の牧師として奮闘しているテモテを励まし、力づけ、また祈り心を持って、真のわが子テモテに書いた手紙がテモテへの手紙第一と第二です。

パウロ自身は、キリストの使徒であるということゆえに、うら寂しい冷たい牢獄に繋がれ、死刑執行を明日に控えるような身となっていました。
そんな生涯の最後の時に思い出された人が、「真のわが子」テモテでありました。
そして、そんなテモテへ使徒パウロが最後に残した言葉が、「『伝道者』としての働きを十分に果たしなさい」ということでした。

このテモテへの手紙が書かれた当時の教会は、大きな苦難の中にありました。
ローマに起こった大火事の原因がクリスチャンたちのせいだと、理不尽な濡れ衣を着せられて、教会やクリスチャンたちに大迫害が起こった時の事でした。
皇帝ネロによって、キリストを信じる者たちが獣の餌食にされたり、松明の代わりに燃やされたり、煮えたぎる油の中に入れられたり、使徒ペテロに至っては逆さ十字架につけられ殺されたりと、見るも無残な大迫害が起こっていた時期でした。

そんな時に起こった教会内の誘惑が、「健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話ばかりを聞こうと、自分の好みに従って自分たちのためのメッセンジャーを立て、主イエスの教える真理から耳を背け、福音だと宣う作り話に反れて行く」ということでした。
そんな中にあっても、パウロはテモテに、「みことばを宣べ伝えなさい。時が

良くても悪くても、忍耐の限りを尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧める伝道者としての任を全うしなさい」と涙ながらに勇気付けました。
　これが、パウロの言う「伝道者」でした。

　では果たして今の時代、使徒パウロ先生の言う御言葉が語られているだろうか、使徒パウロの言う御言葉が求められているだろうか、私自身、こういう御言葉を語ることが出来ているだろうか、忍耐を尽くして御言葉を語っているだろうか、耳に心地よい話をしようとする誘惑に負けていないだろうかと、思わされます。
　テモテも同じような誘惑に会いながらも、心が折れそうになりながらも、使徒パウロ先生の言葉に励まされながら、伝道者としての生涯を全うしたのだと思います。

　私が個人的に好きな聖書箇所と言いましょうか、テモテという方の健気な姿が表れているなあと思う聖書箇所があります。

テモテへの手紙第一５：２３（パワポ）

　テモテはここで、使徒パウロから少量のぶどう酒を飲むことを勧められています。
　どういうことかと言いますと、当時の世界では、今のように蛇口を捻れば綺麗でおいしい水が出て来るなんてことは考えも出来ない世界でしたので、飲み水は貴重なものであり、また衛生的にも良い水を飲むことも、今ほど簡単なことではなかったようです。
　ですので、ぶどう酒を水分摂取の一つとして飲んでいたようなのですが、テモテは、その水分摂取のためのアルコール摂取さえも避けて、水にあたって度々体調を崩していたようです。

　主イエスを信じ、福音に生き、聖霊に満たされる「伝道者」として生きる上で、少量のぶどう酒であってもアルコール飲料は、その助けにならないと考えていたようです。
　何よりも、自分が牧会しているエペソ教会に向けて使徒パウロが書いた手紙の中にあった言葉、その言葉を神からの啓示の言葉として受け止め、真正面から守ろうとしていたようです。
　こんな言葉です。

エペソ人への手紙５：１８（パワポ）

　「一滴も飲んではいけません」とパウロが言っていないにもかかわらず、テモテは、人の弱さ、自分の弱さを素直に認めることが出来たのでしょう。
　「ぶどう酒に酔ってはいけません」というパウロの言葉を「一滴も飲んではい

けません。むしろ聖霊に満たされることを祈り求めなさい」と、受け止めていたようです。

人にとって最も大きな不安のうちの一つが、体調を崩す、病に掛かるということだと思いますが、テモテは、その人として最も不安なことにおいても、主にお委ねし、使徒パウロが語った言葉を優先して守ろうと努めた方でした。
これが、「伝道者」テモテの姿でした。
「こんな聖なる健気さが僕にあるだろうか。こんな健気な信仰に生きたい」と、頭を垂らすような思いが致します。

Part Three

そして最後に、「牧師また教師」についてです。

ここまで、特別だけれども一過性の臨時の三つの職分、使徒、預言者、伝道者について見てきましたが、この三つの職分に対して、「牧師また教師」という職分は、主イエス様が再臨されるその時までずっと続く職分として、聖書に記録されております。
つまり、今の時代の所謂献身者と言われる方々は、皆、「牧師また教師」として立てられている人たちです。

では、牧師と教師は違う役割・人なのか？　違うとすればその違いは何なのか？どういう点で違うのか？ということについては色々な見解があるようですが、私は、牧師と教師の職分は違う役割や人ではなく、一つであると、一人で両方の職分を担うものであると考えております。
なぜならば、今学んでいますエペソ書４：１１の使徒パウロの書き方が、使徒や預言者や伝道者のようにそれぞれ別個の職分として牧師と教師を書いているのではなく、一つの職分として書いているからです。

エペソ人への手紙４：１１（パワポ）

もし牧師と教師が、使徒・預言者・伝道者のように違う職分であるならば、パウロは、「『牧師また教師』としてお立てになりました」とは書かずに、使徒や預言者や伝道者の書き方に続いて、「ある人たちを牧師、ある人たちを教師としてお立てになりました」と書いたはずです。
でも実際パウロは、牧師と教師を分けることはせず、「『牧師また教師』としてお立てになりました」と、牧師と教師を一つの一体の職分として書くんです。
つまり、一人の人が、牧師と教師の役割の二つを担う職分が、「牧師また教師」だということです。

「使徒」という職分について学んだ時にお話し致しましたが、土浦めぐみ教会が属する日本同盟基督教団では、牧師と教師は一つである一体であるという聖

書の教えに従って、試験に合格して按手を受けた牧師のことを正教師と言い、まだ按手を受けてない伝道師のことを補教師と言います。
　牧師・伝道師いずれにしろ、「教師」という言葉を用いて言い表すのです。
　つまり、牧師は牧師であるだけでなく、同時に教師でもあるということですね。

　では先ず、パウロの言う「牧師」とは何を意味しているのか？
　「牧師」と日本語に訳されているギリシャ語言語 ποιήμεν（ポイメン）という言葉は、直訳しますと「羊飼い・牧者」となります。
　羊飼いは、飼っている羊を養うために、視力の悪い羊たちが崖などから落ちないように導き、またどこに行けば草が食べられるのかを教え、出て行った先から羊たちが再び小屋に帰って来られるように道筋を付けながら案内し、獣から襲われないように身を挺して守り、羊との信頼関係を結ぶために、あまりにも言うことを聞かない羊に対しては足を折って、その足が癒えるまで担いで過ごすという大きな役割を担っていたのがイスラエルの牧者・羊飼いでした。

　つまり、教会の牧師は、そのような者であると言うわけです。
　サタンの攻撃から守り、霊的食べ物を提供するために汗水流し、最後に神の御国へと入ることが出来るように時には唾を飛ばしながら、時には責め戒めながら、時には真剣にぶつかりながら、時には抱擁しながら、愛をもって人々と生きていくこと。
　では、果たしてそのような霊的風格のある牧師であるだろうかということが、牧師たちは問われてきます。

　尊敬する牧師先生のある説教の中で、この牧師・牧者という職分について忘れることの出来ないお話を伺ったことがあります。
　この先生ご自身が牧師であり、牧者として立てられていることを聖書読みながら黙想しているとこんな思いが与えられたそうです。
　「ああ、僕は牧者じゃなくて、真の牧者であるイエス様に従っている犬だなあ、牧羊犬だなあ。
　牧者の意図を汲み取ろうとその表情を伺いながら、羊たちの周りをワンワン吠え立てている犬に過ぎないなあ。
　ならば、その牧羊犬としての役割を一生懸命に担いながら、許される時まで生きて行こう。」

　この言葉に感動しました。
　「何はともあれ先ずは、僕もこんな犬で、牧羊犬でありたいなあ」と思われました。
　「忠犬洪でありたいなあ」と思わされました。
　そして、真の牧者であられるイエス様のお働きに喜んで従って行く、羊たちを守る犬でありたい」と願っております。
　こんな犬のような牧師を、これからもどうぞよろしくお願い致します。

Part Four

そして、教師ですね。
教師とは、教える人のことです。
つまり、聖書を教える役割を担わされているのが教師です。
聖書を教えることを諦めたら、もうそれは聖書の言うパウロの言う牧師・教師ではなくなってしまいます。

牧師をやっていて色々な誘惑がありますが、その多くの誘惑の内最も大きな誘惑のうちの一つが、聖書を教えることをないがしろにしてしまうという誘惑です。
正直、牧師をやっていて、一番大変なのが聖書を教えること、聖書を説き明かすこと、そして聖書を教え説き明かすことが出来るように毎日努力すること、これが私にとっては一番辛いですし、大変です。
「そんなの牧師として基本中の基本なんだから、敢えてそんな弱音じみたこと言わなくてもいいんじゃない」と思われるかもしれませんが、私にとってはこれが一番大変です。

人と会ってお話をすること、楽しいですね。
問題に顔を突っ込んで、一緒にそれを解決しようと努めること。
誰かを助けるために、その現場へと向かうこと。
相談に乗ること。
バスや車の運転。
葬儀や結婚式などの通過儀礼の準備と司式。
「これが、牧師としての働きのすべてであったら、意外と楽しい職業が牧師じゃないかなあ」と思ったりもしますが、いつも何をしていても頭から離れない負担と言いましょうか、「ふう～」とため息が出てしまうほどに恐いのが、聖書を教えるための努力の時間、御言葉との格闘の時間です。
出来れば避けたいですけれども、避けたら、もうそれは牧師でもなければ、使徒パウロ先生の言う教師でもなくなってしまいます。

でも一方で、聖書の御言葉を教えるという働き以上に楽しい、無駄でない、心を躍らせる、霊魂の奥底から湧き上がってくる喜び、達成感、報われた、充実感、満足感、そして主のご臨在と導きと守りと知恵を感じることはありません。
御言葉を教える、御言葉を説き明かす、聖書の教理を分かち合うということのための努力とその実践ほど、嬉しいものはないというのも事実です。

教師しての働きは、牧師ならば決して諦めてはいけないものですし、最も集中しなければならない働きでもあると思います。
先程の使徒の働きの言葉が正にその通りだなあと思います。
もう一度見てみましょう。

使徒の働き６：４（パワポ）

めぐみ教会の牧会スタッフが、この御言葉を諦めることのない牧者・教師であれますようお祈り頂けますと幸いです。

Conclusion

説教を締めたいと思います。

キリストご自身がそのみからだである教会を建て上げるために、時に適って、使徒、預言者、伝道者、牧師また教師をお立てになりました。
そして、そのどの職分の人たちも、完璧な人はいませんでした。
むしろ、欠けだらけで、足りないところだらけで、「え、こんな人が！？」と思うような人たちもいました。

私なんか、石川豊和と名乗っていた頃の私を知っている友人たちから「え、お前なんかが牧師やってんの！？」と言われる自信があります。
それでも、計り知れない恵みで、牧師をやらせて頂いております。

使徒パウロもそうでした。
ガラテヤ書１：１５で、

ガラテヤ人への手紙１：１５（パワポ）

と、告白するしかないような恵みを受けただけの者でした。
教会やクリスチャンたちにことごとく酷い迫害を科していたパウロに、主イエス様はご自身のお姿を現しながら、「あなたはわたしを宣べ伝える器である」という言葉を語り掛けながら、使徒として召し出しました。
ただただ、キリストなる神様のぶっ飛んだ恵み、あわれみ、赦し、慈しみ、そして、人を用いる選び出すというその壮大なご計画と祝福によるものでした。

まだクリスチャンでない方々もいらっしゃると思いますが、私たちクリスチャンという人たちは、キリストに属する者として、その神様のぶっ飛んだ恵み、あわれみ、赦し、いつくしみ、ご計画、祝福に依り頼み、互いに互いの存在を尊び合いながら、この世にキリストの香りを放つ者でありたいと、その恵みと祝福を分かち合いたいと願っている者たちですよね。
そして、さらにキリストのからだに加えられる人が興され、ともに成長し、ともに成熟していくことを願っている者たちでもあります。

そんな人を徹底して祝福し、用いなさる主なる神様、御子なるイエス様、聖霊なる神様の三位一体なる神様の名を褒めたたえます。
お祈りいたします。　　祝祷：エペソ書４：１１